

## 「絵師草紙」の制作環境

—その図像的系譜と主題意図から—

中垣千尋（東京藝術大学）

宮内庁三の丸尚蔵館蔵「絵師草紙」（1巻、14世紀前半）は、貧しい絵師が自身に起こった出来事の顛末を絵にして伝えるという特殊な叙述形式をとる絵巻物である。本発表は「絵師草紙」について、他作品との比較を通じてその図像的系譜を明らかにし、得られた知見から主題の意図と制作環境について考察するものである。

「絵師草紙」という絵巻について、先行研究は概ねこれを説話として扱うが、史実やそれに則したものと見なす説もあり一致した見解をみない。また、画面に比して人物、とりわけ頭部を大ぶりに捉え表情豊かに描き出す画風は「異色」と評されるに相応しい。しかしそれゆえに同時代絵巻様式の系譜からは孤立しがちである。従って本絵巻の再検討には、描かれた内容の由来や意図についてあらためて新見地から分析・考察する必要がある。

まず、「絵師草紙」の諸場面について他絵巻との比較を試みた結果、本絵巻の図像典拠が、「年中行事絵」（12世紀後半）、高階隆兼筆「春日権現験記絵」（延慶2年〔1309〕頃）という絵所の2つの作例に求められることを確認した。「絵師草紙」には酒宴や貴族邸宅といった描写に際し、それぞれの関連場面から断片的に図像を引用し、それらを混成して用いている箇所が少なくない。その取捨のあり方は本絵巻が上記2作例を同時に参照し得る環境で描かれたことを示すが、3者の細部比較からは、作画態度の大きく違う隆兼工房と本絵巻の間において緊密な図像の共有関係があったことがわかる。

次に主題意図について検討する。絵師が朝恩を反故にされるという話について、宮次男氏はこれを戯画として朝令暮改の社会を風刺したものと解釈し、その背景として建武の新政（1333-36）を想定する。本発表では氏の見解を支持した上で、「絵師草紙」中で綸旨の束を小脇に抱える役人の図像が、「年中行事絵」において嘲笑の対象であった図像に由来することなどから、暗に綸旨の乱発が揶揄されていることを確認したい。これは治世を讃え帝にすがりつく詞書とは矛盾する表現である。また老母や妻の描写をめぐっては、絵第2段が西行説話集『撰集抄』に由来する歌絵図様を含むことから、詞書と『西行物語』の類似箇所を比較検討した結果、本絵巻は西行（1118-1190）の出家譚に重ねながら絵師を滑稽に描写しているという見解を示したい。

以上の考察などから「絵師草紙」は、絵師に仮託し説話の形式に則って制作された戯画そのものであったと考える。そしてその制作の場として想定されるのが、当時後醍醐天皇（1288-1339）と政治的対立関係にあった花園院（1297-1348）の周辺である。「絵師草紙」中に参照された古今の絵巻は、いずれも制作当初より秘蔵性の高いものだったが、絵画を好み自らも画筆を執った花園院は、在位中「年中行事絵」の進覧を受け、「春日権現験記絵」の中書20巻を所持し、その画事に隆兼を召したことが知られる。こうした環境的条件に加え、持明院統サロンにおける見立ての文芸嗜好を鑑みると、本絵巻が花園院の参画のもと、戯画として制作された可能性が高いことが指摘される。